

## 「桐生悠々物語---ペンは死なず」(続き)

観客席からとは違い、舞台上「役者」として演じるのは、なんとも言えない緊張感がある。それを味わえたのは偶然ではあるが、私を導いた「糸」があるような気がする。写真はたぶん本番直前と思う。左下に立っているのが私であり、今とは違い黒い「ふさふさ髪」であった。中央下の女性が、たぶん桐生悠々の妻・寿々さん役だと思う。



どうも寿々さんのことが気になり、あらためて井出孫六さんの本をチェックした。付せんをつけたところを書きとめておこう。

「下野新聞」主筆として宇都宮に単身赴任した悠々は、同じ金沢出身の寿々を妻として迎え、新しい生活の出発点とした。寿々は悠々と14歳もへだたる小娘であった。降って湧いたような窮境に直面したとき、この無冠の太夫(悠々)は「木から落ちた猿」のように頼りなく、難局をひらく役は、もっぱら妻寿々にふりあてられる。信州から突如「名古屋に引揚げることを宣言した」頃のことだ。晩年、名古屋で「他山の石」という雑誌を厳しい検閲のなかで発行するが、事務所は悠々の自宅だった。果してうまくいくのか。そこは、手は出すが口は出さない”事務”の寿々が財務・庶務の一切を掌握して悠々を8年間助ける。この専務なくして、「他山の石」はありえなかったろう。

結婚以来約40年悠々と辛酸をともにしてきた妻寿々は(悠々の死後)遺された多くの子を育てつつ、名古屋郊外守山の家を守った。---昭和20年3月26日の朝、硝煙のたちこめる焼跡にもどってきた守山の人びとは、桐生家を中心とするその一画だけが、すっぽりと戦火を免れて無事な姿をのこしているのを目にして、またふと4年前に逝った老記者のおもかげが彼らの頭をよぎった。そのときほど、妻寿々にとって、悠々の霊が近くに感じられることはなかったにちがいない。戦中戦後をしたたかに生きのびた桐生寿々は昭和50年12月4日、多くの子と孫に囲まれて88年の破乱の生涯を、名古屋郊外守山の自宅で閉じた。この空襲のエピソードが隣人の口から語られたのは、寿々の通夜の席であった。

「抵抗の新聞人 桐生悠々」は、とくに晩年は妻寿々との二人三脚で活動を続けた。劇でも悠々を健気に支える寿々の演技が印象的であった。金沢から信州、そして名古屋を転々とする桐生悠々と寿々の歩みは、私にとって親近感を感じる。拙著『災後の新聞』にも書いたように新聞が厳しい状況にあり、懐かしの「桐生悠々物語」を思い起こす。

(2014年9月2日)